

人が見守る時代から、"気づける仕組み"が支える時代へ。

帰省した数日だけでは、守れない日常がある。

— 人・住まい・街をつなぐ、新しい見守り —

久しぶりに帰省した実家で、「少し痩せたかな」「前より歩くのがゆっくりになったかも」そんな小さな変化に気付いた経験はありませんか。帰省している間は安心でも、家に戻ればまた離れて暮らす日常が始まります。

だからこそ今、「離れていても気づける仕組み」が求められています。

——今回は、お盆シーズンに見えてくる高齢者見守りや防犯の課題を通じて、Secualが考える“新しい生活安全のかたち”をご紹介します。

帰省で見えてくる、今の日本の見守り課題

帰省中に感じた親の変化を「気のせい」ですませていませんか？

総務省の国勢調査によると、日本では65歳以上の人口割合が年々上昇するとともに、65歳以上が暮らす単身世帯や夫婦のみの世帯も増加しています。

子どもの独立や就職、結婚などをきっかけに、親子が離れて暮らすことは珍しいことではありません。

一方で、共働き世帯の増加や生活スタイルの変化により、実家を訪れる機会は以前より少なくなっています。

だからこそ、お盆や夏休みの帰省は、離れて暮らす高齢の家族と向き合える貴重な時間です。久しぶりに顔を合わせたとき、「少し歩くのがゆっくりになった」「外出する機会が減ったように感じる」など、小さな変化に気づく方も少なくありません。

しかし、帰省は数日で終わり、再び離れて暮らす日常が始まります。高齢者だけの世帯が増える今、「離れていても、日々の変化に気づける環境」をどうつくるかが、多くの家庭に共通する課題となっています。

高齢者世帯数と高齢者割合の推移

※総務省「国勢調査（平成12,17,22,27,令和2年）」をもとに作成

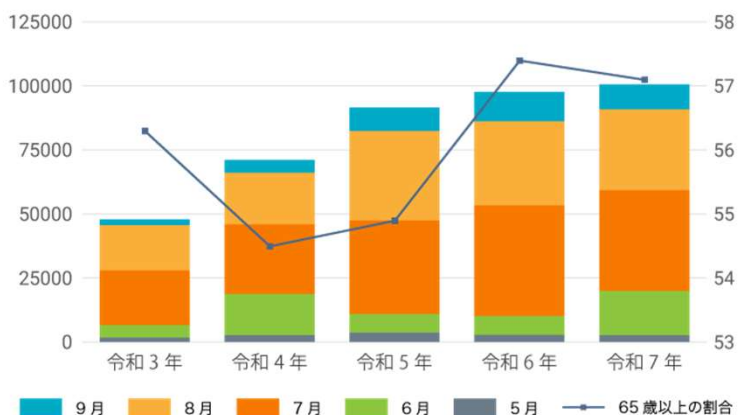
猛暑で高まる、「気づけない」リスク

高齢者だけで暮らす世帯が増える一方で、家族が日常的に様子を見に行くことは簡単ではありません。共働き世帯の増加や地域コミュニティの希薄化により、「誰かが気にかけている」という環境は以前より少なくなっています。

こうして生まれているのが、“**見守りの空白**”です。

特に夏はそのリスクが高まります。総務省消防庁によると、熱中症による救急搬送者の半数以上は65歳以上の高齢者です。室内で発症するケースも多く、異変の発見が遅れることも少なくありません。

帰省した数日だけで終わらない安心のために、日頃から変化に気づける仕組みが求められています。

熱中症による救急搬送数と高齢者の割合

※総務省「令和7年（5月～9月）の熱中症による救急搬送状況」をもとに作成

見守る人にも、見守られる人にも"やさしい見守り"へ

Secualが目指すのは、見守る人も、見守られる人も負担にならない「やさしい見守り」です。

大切なのは、常に誰かが見守り続けることではありません。離れて暮らしていても、日々の暮らしの変化にそっと気づき、必要なときだけ支えられること。それが、家族にも高齢者にも無理のない見守りにつながります。

Secualでは、生活リズムや室内環境の変化を見守り、異常の可能性があれば見守りセンターによる安否確認につなげることで、「いつも通り」の暮らしをさりげなく支える見守りサービスを提供しています。

また、WBGT（暑さ指数）の取得・可視化を通じて、高齢者への熱中症予防の注意喚起や屋外活動時の安全確保など、人だけでなく、人を取り巻く環境にも目を向けた安心づくりにも取り組んでいます。



人が見守れない時代に、街が支える安心へ

家族や地域のつながりによって支えられてきた「見守り」は、今、「人の不在」を前提とした社会へと変化しています。だからこそ、これからの見守りに必要なのは、人の目だけに頼ることではなく、暮らしの変化や周囲の環境に自然と気づける仕組みです。

Secualが目指すのは、住まいの中だけで完結する見守りではありません。人の暮らしと、それを取り巻く街や環境をつなぎ、日常の変化をさりげなく見守ることで、異変の早期発見や予防につなげる社会です。

ホームセキュリティ事業とスマートタウン事業の両方を展開するSecualだからこそ、住宅・地域・公共空間をつなぎ、「人」「住まい」「街」を一体で支える新しい安心のかたちを実現していきます。

人が見守れない時代だからこそ、街が支える。

——それが、Secualが描くこれからの安全・安心の未来です。